
「キツネの温泉」

rina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「キツネの温泉」

【Nコード】

N4024M

【作者名】

r i n a

【あらすじ】

イギリスが日本の家に交友を深めるために遊びに行くと「キツネの温泉」という一冊の絵本があり、その話がどこことなく自分とアメリカに似ていると日本に言つと、ここの絵本に書かれている温泉は本当にあるという。そこでイギリスはアメリカをその温泉に誘うのだが…

1・キツネの温泉（前書き）

この話に出てくる『キツネの温泉』は
「タクミくんシリーズ」の小説に出てくる物語を
もとにした話です。

1・キツネの温泉

「キツネの温泉」

むかしむかし、人里離れた山奥に、キツネの夫婦が住んでおりました。

ある日、巣穴の前に、生まれたばかりの人間の赤ん坊が捨てられてたのです。

キツネ夫婦は柔らかくておいしそうな赤ん坊を、久しぶりのごちそうと大いに喜び、

さっそく食べてしまおうとしましたが、赤ん坊が夫婦を見てあまりにも無邪気に笑うので、

食べるのはしばらく先にすることにしました。

コン、と名付けられた赤ん坊は、山の恵みを受けてすくすくと、素直に美しく成長いたしました。

いつものように、木の実を集めに森の中を歩いていた婚は、山賊に襲われ大けがを負った

若者を見つけました。今にも息絶えそうな血まみれの若者を。コンは必死で抱え上げ、

キツネの両親が住む巣穴へと運んで行ったのです。

瀕死の重傷を負った若者に、キツネの夫婦は暗く顔を見合わせましたが、コンは巣穴の近くに

こんこんと湧く温泉から湯を運び、懸若者の手当てをしたのでした。

その温泉は血を止め、病を治し、空腹を抑え、心を癒す、それはそれは不思議な温泉なのでした。

コンの懸命な看病の甲斐もあって、やがて若者は深く永い眠りから目を覚まし、

そして一目でコンに恋をしたのでした。

すっかり元気を取り戻した若者は、自分は峠を北へふたつ超えた先の大きな差との、大きな庄屋の跡取り息子で、家人が心配しているであろうから一刻も早く帰らねばならない言を告げました。

コンも連れて行きたいと申し上げた若者に、キツネの夫婦はどうしても首を縦には振りませんでした。

仕方なく、若者はひとり、山を去りました。

コンは若者恋しさに、日々泣き暮らしていましたが、山を出る勇氣はありませんでした。

人里へ下りたキツネがどんな目にあうか、知っていたからです。

コンは、自分は両親とオナジキツネだと思っていたのです。

コンの涙はとめどなく流れ、やがてどんどんと体がしぼんでゆき、ついには小さな花になってしまいました。キツネの夫婦はコンの花を、

北の里が見える山の斜面に移してあげました。

そうしてコンはいつまでも、遠く若者を慕いながらひっそりと咲き続けたのでした。

おしまい

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたんです？イギリスさん。子供のみる絵本なんか手にとつて」

「あつ、いや、どんな話なんだろうなって思つて……」

イギリスは日本との交友を深めるため日本の家に来ていた。

そして沢山ある書庫内の日本特有のさまざまな本を見ると、一つの絵本が目に入った。

それが今イギリスが手にしている『キツネの温泉』だった。

名前は『地方の昔話シリーズ』著者の名前が載っていない不思議な本だった。
それを真面目に読むとイギリスは何となく困ったような顔をしていた。

「…なんかこれ昔の俺とアメリカみたいな感じがしてさ。まあ、内容は全く違うんだけどな」

「そうなんですか…??」

「ああ、俺最初にアメリカ見つけた時は、ただ国を手に入れたい。もっと大きくなりたい。

っていうそんな願望しかないただの欲のある奴だったんだ。けどあいつが俺の料理を…みんな

『マズイ』って言うのに初めて「おいしい」って言うてくれたのがアメリカで、俺がひとりで

居た時も支えになってくれたのがいつもアメリカだったんだ。だからずっと一緒にいてほしい。

他の奴らなんかに渡さないっていう感情が一気にこみあげて…反対にアメリカをずっと苦しめてた…」

「……………」

日本にはイギリスにかける言葉が見つからなかった。

イギリスはめったに自分の過去のことを話さないの、何を言ってもいいか余計にわからない。

こういうときにはただ相手の話を聞いてあげるのが正しいのだと思っただ。

「それでアメリカは独立したいって急に言いだして俺は猛反対。そ

して戦争になったんだ。

そんな時はただのバカだったんだ。あいつが苦しんでたことも何も考えていなかったんだから…

そして俺の周りの味方がみんなやられて二人で顔を見合せた時、初めてアメリカの気持ちを知った。

知ると余計に自分に腹正しくなつてアメリカに銃口向けたが、打てるわけがない。

小さいころからずっと育ててきた俺の初めての弟だったんだからな。

その時思つたんだ。こいつが幸せならいい。もうこいつを苦しませるのは嫌だつて。

だからこの戦争は降伏してアメリカは独立したんだ。

まあそのおかげであいつはもう立派な国になったけどな。

わりい、急にこんな話して。けど、こんな温泉があるんだつたらもつと早くに

癒されてもつとアメリカに優しくできたのにな……」

「大丈夫ですよ…イギリスさんもつらい過去を持っているのですね。

もしかしたら中国さんもそう思っていたのかも知れませんか…」

日本は軽く下を向き苦笑いをした。

たぶん自分が中国のことを何も言わずにたたいて独立したことを思い出したのだろう。

「？なんかいったか？？」

「いえ、ただのひとりごとですよ…アーサーさん、そのキツネの温泉に出てくる温泉

本当にあるんですよ」

「ほっ 本当か!？」

目をぱちりと開け、満面の笑顔になっているイギリスの目がとも輝いて見える。

「はい、その山の裏に『キツネの湯』という温泉があるんですよ。」

ですので、今度アメリカさんと言ってみてはどうでしょうか？

きっと心安らいで、沢山話することができると思いますよ」「

日本は自分の部屋のふすまを開けそこには外の景色がとてもきれいに見えた。

その景色の中心あたりにある大きな山を指差した。どうやらその山の裏の少しのぼったところに

その不思議な温泉はあるらしい。

「そうだな……今度誘ってみるか！」

「はい。いいと思いますよ」

「うん」

これで少しでもアメリカと昔のように仲良くなれるのなら……俺も過ちを少しでもやわらげてくれるなら……

その後

「なつなあアメリカ…べつ別にお前と行きたいわけじゃねーけど
明後日一緒に日本にあるなんでも願いが叶うっていう温泉にいかね
ーか??？」

急にイギリスが腕を組み顔を少し赤らめて斜め上を向きながら
コーラを飲んでいたアメリカに言い、驚きで口に含んでいたコーラ
を噴出した。

ガタッ

「別にいいけど…急にどうしたんだい??？」

アメリカはハンカチで口の周りをごしごしと拭いた。

その目はぱっちりあき、驚きを隠せないことがよくわかる。

「いついや!!俺はただ日本の絵本みて昔の俺らだなあって思っ
てそこで全部癒されいとか

そんなこと思ってたわけじゃなくて日本が!日本がそんなすごい温
泉があるから

お前と行けって言ったんだよ!!!」

手をぶんぶんと振ってイギリスは余計に顔を赤らめた。

なぜかそれがアメリカにはとても面白かった。

「……ふうん。まあいいや。君から誘ってくるなんて珍しい
からね。

それにそんなすごいところだったらきつと君の料理の下手さも治る
んじゃないか??？」

「サンキュー… って！アメリカっ！！俺は別に下手なんかじゃねーぞ！！」

ただ味覚がちょっとおかしいだけで……………それよりも！！
そつえばお前と二人で旅行なんて本当に久しぶりだよな」

「ああ。俺が独立して以来かな？ここ最近はみんなでいることが多くなっただね。」

まあ明後日の温泉旅行楽しみにしてるよ。」

「ああ。あつ俺これから上司のところに行かないと行けねーから！
じゃー明後日

迎えに来るからな！！」

「ああ！」

こうして旅行に行けることになったイギリスは、上司に呼ばれてると適当に嘘について

自分の家に戻った。内心すごく嬉しくてもう早く準備して行きたかったのだ。

そして明後日を楽しみにしてイギリスはずっと妖精さんたちに温泉旅行の話を

一日中していたのだった。

二日後…

ブルルルルルブルルルルル…

「んっ？？」

イギリスがアメリカのうちに起こしたら急に電話がかかってきた。

「はいもしもし、こちらはイギ……」

「ごめんイギリス！今日温泉に行けなくなっちゃったんだよ！！！急に今日に限って緊急会議することになっちゃったんだ！大量に輸出物を入れた船が

転覆して物が全部海の底に沈んじゃったんだよ！だからその対処について早く会議を開かないと

いけなくなつて…君からの誘いだつたのにゴメンよ！！」

イギリスは途中から何も聞こえてなくて、ただ茫然としていた。

アメリカが来ない？約束を破った？？今までそんなことあいつは絶対にしなかったのに…

「……わかつた…もういい」

「ちよつまっ！！！！」

ガチャッ

アメリカの言葉を聞くまでもなくイギリスは電話を切った

「…くそっ！！バカアメリカ…あいつなんか知るか！！もうひとりで行ってやる！！！！」

すると急いで家を出て日本へと向かった。

「イギリス…きつと怒ってるよな…けど！俺のせいなんかじゃない

んだぞ！！
転覆した船が悪いんだぞ！！………って言ってももう遅いんだよな……」

アメリカは少し肩を下げて会議室へとぼとぼ歩いて行った。

日本

「えっと……確かこの山の道を歩いてけば湯気が出るからそれでわかるんだよな……」

イギリスは風呂道具を詰めたリュックを持って少し急な道なりを登って行った。

「ハアハア、結構……きついな……あの若者ってやつはけがをしながらこんなところまで来たのかよ……」

イギリスは息を切らして少し限界に近付いていた。それほどまでにきついのだ。

しかし30分歩いていると、目の前に湯気が黙々と見えた。

「温泉だ……！」

イギリスは最後の力を振り絞って走り温泉にたどりついた。すると、温泉の中にはひとりの老人が入っていた。

「っあっ……」

「おお、これは外人さん、どうです？ここの湯はとても気持ちいい

ですよ」

「ああ…はい」

おじいさんに言われるがままイギリスは服を脱ぎ石の上に置くと湯につかった。

「ああ気持ちいい、山のぼった後の温泉はこんなに気持ちいいんだな」

「そうですね。私の10代から来ていますがこの温泉は他のどこよりも気持ちいいです」

「そんな昔から来てるのか？」

「はい。ここで昔に会った女の子に会いたいなと思ってずっと来てたんです」

「女の子？」

「ええ私がひどいけがを負ったときずっと看病してくれたんですよ。それはとても綺麗な子で、

一目で好きになりました。連れて帰ろうとしましたがその子はキツネの親に育てられた身で、

こっちに来ることはできなかったんですよ…」

それって…もしかして…

イギリスは温泉から急に上がるとリュックから絵本らしきものを取り出した。

「もしかしてこの話か!!?」

イギリスが手にしていたのは日本に借りた『キツネの温泉』だった

「?なんですかそれは??」

「読んでみてくれ!!あなたが言ってるのこの話は重なるんだ!」

イギリスは絵本を差し出し、老人に読ませた。すると老人の目から涙がほろほろと流れ始めた。

「これは私ですよ。なんて偶然、私とコンのことをずっと見ていたかのような絵本ですよ」

老人は涙を脱ぐってその絵本を優しい笑みで見ていた。
日本ならきつと許してくれるよな…

「その絵本あげようか??それはきつとご老人が持っていた方がいいと思うからな」

「くれるのですか…ありがとうございます。ありがとうございます。」

外人さんがこんなに優しいお方だとは思っていませんでした」

老人は本当に嬉しそうで自分まで嬉しくなった。
感謝されるのはとても久しぶりだったのだ

「もしかしたらあそこに咲いている一輪の花がコンなのかも知れませんか」

「えっ？」

老人が向いている先には北の方をずっと眺めているように咲いている一輪の綺麗な黄色の花があった。

「まさか……」

1・キツネの温泉（後書き）

もう一話で終わりますが、「続きも見えてやってもいいけどな!」って人は

みてくれると嬉しいです^^

2 ・大切な人（前書き）

これで『キツネの温泉』は終了です。

この話は少し長いですが、みてくれると嬉しいです^^

2・大切な人

「きつとそうだ！あそこに一輪だけ咲いてるのは不自然すぎる！あれはきつとコンだ！その絵本は本当だったんだよ！！」

イギリスは確信をもったように力強く言った。

老人はさっきよりも大粒の涙を流し、その言葉を信じたようにコクコクとうなずき、風呂から出ると着替えその花の前まで行った。

「…そうか…君がコンだったのか…気づいてやれなくてごめんな。

今まで何十年もずっと見てくれたのだろうか？私が結婚してもずっと君のことを気にかけているから…けどもう大丈夫じゃ。こうして君に話せた

だけで私は満足じゃよ。だから君も安心してもう休んでもいいんじゃない。

今まで御苦労さま。そしてありがとうな」

そう言い老人はコンの頭を優しくなでた。するとそれを受け止めたかのように

コンの花はお辞儀をしたように下を向き、また上を向くと徐々に枯れて行き、

細かくなって消えていった。たぶん、きつと安心して天に昇って行ったのだろう。

老人とイギリスは空を眺めた。その時の空はとても青く澄んでいたのだった。

「……………行っ たんだな。コンの奴……」

「そうですね… あつちでは幸せに生きてほしいです。そしていつか私が死んだとき

きつとコンを迎えに行きますよ。どこにいても見つけてあげます」

「そうだな。きつとコンも喜ぶさ、ずっとあんたを待ってたんだからな…」

イギリスがにこやかに言う。老人はまたコクコクと頷くと荷物をまとめた。

「はい…………… それじゃあ私はこれで、これ以上いたらばあさんが心配しますので」

「あつ、そういえば結婚したとか言ってたな」

「はい、やはりずっとひとりで居るのは心細いもので、私がコンのことを忘れられず途方に暮れていた時、ばあさんがずっと

励ましてくれてな、この人ならいいと思えたんですじゃ。」

「そうなのか… 俺も小さいころからずっと一緒に今は喧嘩してるが… 大切な奴がいるんだ…」

「そうなんですか… 喧嘩は早く仲直りした方がいいですよ。そのままにしておくと後で後悔しか残りませんからね」

「ああ… わかってる。帰ったら仲直りしてみるさ」

「そうですね。ならよかった… では私は… いつかまたあなたにお会いすることがありましたらその時はお願いしますじゃ」

「ああ、またな！そのおばあさんにもよろしく言つていてくれないか？」

「はい」

そう言い残すと老人は一礼して山を下りて行つた。

二人は名前も聞かないままだった。きつとまた会えると信じているのだろう。

自分たちは小さなところで似ている。だからきつとまた会えるだろう……と。

イギリスは老人を見送つた後、今更になつて気づいた。

温泉に入っていたことを忘れ、下半身にタオルを巻いていただけで、お湯だった水滴も風で水となりとても冷たい。イギリスはくしゃみをした。

「ヘックシュツ……ああ……このままじゃ風邪ひくな。もう一回あつたまつてから入るか」

そしてまた入ろうと岩に上がろうとしていた時、林の中からものすごい勢いで何かが来る音が聞こえてきた。

「なっなんだ！？」

「イギリス！！！！！！いるかい！？」

「アメリカ！！！！なんでここにいるんだよ！来ないって言ってただろ！！！！」

林から抜けて出てきたのはアメリカだった。

イギリスは驚いて少しきつい言葉を言った。内心ではとても喜んでいて、幻覚かと思いたくなるほどで、その嬉しさが目にまで来ていた。

「君ちゃんと俺の話を聞いてたのかい？俺は緊急会議が入って“今日は”いけないって言ったんだよ。そのあとに明日には行こうって言おうとしたら君は“もういい”って電話切っちゃうし、急いで終わらせて電話したら君は温泉に居ないっていうし、君温泉の場所もおしえてくれなかったから日本に聞いたら山の中だつて言うし・・・もう今日は散々だよ・・・君はちゃんと最後まで人の話を聞くってことをした方がいいと思うよ？？」

「なっ！！おつ俺はその・・・えっと・・・すまん・・・あのときはちょっと気が動転してたんだ・・・もっもういいだろ！！早く入るぞ！！・・・一緒に・・・」

イギリスは岩に座り、太ももなどにお湯をかけ慣らしてたら中に入った。湯が熱かったのかイギリスの顔は赤くほてっていた。アメリカは「はあ・・・」とため息をつく。「わかったよ」と言っで服に付いた木や葉を払いながら脱いで同じく温泉につかった。

「ふゝ、全速力で山を登った後だから凄い気持ちがいいなあ」

「だろ？俺がこここのぼつてきて入った時も気持ち良くてさー、そしてたらそこに老人がいて・・・」

それから二人はここで会った話や緊急会議でのこと、最近の国の面白話など普段は話さないことを沢山話し続けた。
話しているうちにアメリカのスリキズなのが知らないうちに消えていたのだった。

「へえ、そんなことがあったのかい。その老人も何十年も忘れられずにここに通ってくるなんてすごいね。俺はもし君がいなくなってもそんなこと絶対に出来っこないよ」

「なっ！！俺だってお前がいなくなっても絶対やんねーよ！！！！！！」

イギリスは目を白目にして立ち上がり手をこぶしにして叫んだ。

「嘘にきまつてるじゃないか。君は嘘と本音の区別もつかないのかい？本当に“馬鹿”だなあ」

アメリカは『馬鹿』を強調させるようにそこだけ大きな声で言った。

「なっなんだと！この…」

言いかけた後、アメリカが大きな声で言い、その声を拒んだ。

「けど！！俺はたぶん君が本当にいなくなってしまったらその老人と同じ行動をするかもしれないな。君は大嫌いだけど、俺を育ててくれた人だからね。そんな君に急にいなくなれるのはちよつとね…」

「俺も…だ。さっきは思ってもないこと言っすまない…俺もお前にいなくなれると困る。」

お前はずっと育ててやったのに急に『独立』して俺の元から去って行って前までは俺の隣からいなくなつたお前が大っ嫌いだった。だけどそれは俺にも非があつて、独立に追い込んだのも俺だつてわか

つたんだ。俺だってお前がいなくなったら絶対に嫌だ！！！」

「イギリス……」

そのあと本音を話し続けた。その時だけはいつもと違い二人ともお互いに本音を言い合っていた。

その時イギリスは日本の言った言葉を思っていた。

日本の言った『沢山話すことができる』と言うのは本音を言い合えるってことも含めた言葉だったのかもしれない……

「イギリス！！君は絶対俺の前からいなくなっちゃだめなんだぞ！！」

「お前もな！馬鹿メリカ！！」

「馬鹿は余計なんだぞ！アホギリス！！！」

「なんだと！このヤロー！！！」

バシヤツ

イギリスがアメリカの顔面めがけてお湯をかけると「やったな！！！」とアメリカも反撃。それが繰り返され逃げたり追いかけたりでその光景はまるで子供のころに戻ったようだ。そのあと二人は滑って溺れかけたりしながらも遊び続け、気がつけばもう夕時の6時になっていた。

人はひとりでは生きてはいけない。だからこそ人は群がりそこで支えあって生きているのだ。

あなたにもし本当に大切な人、守りたい人、守ってくれる人、そん

な人がいたら、その人を一番の支えにしてあなたの人生という道を歩みなさい

こんなことを昔誰かが言った。たぶん今の俺の一番大切な奴はアメリカだ。

だからこそいつがいなくなうのは絶対に嫌なんだ。俺がこいつを守らないとな…

イギリスはそんなことを思いながらアメリカを眺めていた。

「アメリカー、もう帰るぞー！これ以上遅くなると日本が心配しちゃう」

「っえ？あつ！！もうこんな時間になつてたのかい！？」

どうやら日が暮れていたことに気づいていなかったらしい。

お湯をイギリスにかけようと少し屈み腕を下ろし手にお湯を入れていたその体制から

もう終わりというように温泉に肩までつかった。

「日が落ちるのもわからないくらい遊びに集中してたのかよ…」

「だつてさ、君と遊ぶことなんて独立して以来なかったろ？だから昔のことを思い出してたんだよ。まだ俺が“遊ぶ”ってことも知らないときに君が「遊び方を教えてやる」って言ってキャッチボールを初めて教えてくれたこと。結局最後は俺の方が投げるの早くて君は顔面にボール直撃で2日間入院したんだよね。いやぁ俺、あの時は人が死ぬってことも知らなかったのに涙が出てきてなんだろうってずっと思ってたんだよ」

「あれは子供だったから少し油断したんだよ！…まあ心配させたのは悪いと思うけどさ…泣いたってことは、心の奥で俺が死ぬのは嫌だって感じてたんだろ。国とは言え、人間でもあるからな。俺らは…」

「そうだね…もう上がろうか！！」

「そうだな」

二人は立ち上がり、服を着替えた。

アメリカは一応準備してきたものに着替えも入っていたので、木や葉や土などで汚くなった服は着ずにすみ、イギリスも着て来たのと違う服を着た。

「ここの温泉、本当にいい温泉だったね。また来ようよイギリス！！」

「…ああ、でも次は絶対二人で来るぞ。緊急会議が急に来てもちゃんと待ってやるしお前も待ってるよ」

「わかってるよそんなことくらい」

「ははっ、そうだな」

そんな他愛のない話をしながら二人はイギリスが来た道を帰って行った。

この温泉は血を止め、病を治し、空腹を抑え、心を癒す、不思議な温泉。

これは本当のことだったのだ。イギリスとアメリカはそれを実感していた。

イギリスはこの温泉に入ったことでアメリカと和解し、より絆が深まり心癒され、

アメリカは傷を治しイギリスと一緒に心も癒された。

きつとこの温泉は神様がくれた人が生きていくためにくれたほんの少しの贈り物。

俺らに大切な人を大事にすることを教えてくれた思いの詰まった温泉。

だけどまた俺らは喧嘩を繰り返すだろう…だけどまたちゃんと仲直りして、

相手をちゃんと大切に見守っていこう…

俺はアメリカがいたからひとりじゃなかった…さびしくはなかった…アメリカは俺がいたからここまで大きく成長できたんだ…

だったらこれからも支えあって生きていこう…

君は俺にひとりじゃないことを教えてくれた大切な人だから…

2・大切な人（後書き）

ここまでこんな味噌っかすの小説見ていただき
ありがとうございます^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4024m/>

「キツネの温泉」

2010年10月10日15時21分発行